

## 観音物語 (13) 幻覚の鬼たち

わくぐうあくら せつ どくりゅうしょ きとう ねん び かのんりき じしつ ぶ かんがい  
或遇悪羅刹 毒龍諸鬼等 念彼観音力 時悉不敢害

或は悪羅刹と 毒龍の諸の鬼等に遇わんに 彼の観音の力を念ずれば 時に悉く敢えて害せず

覚醒剤は体内に常習歴が蓄積される。再び始めればすぐに幻覚症状が出る。中年男は青年のときに覚醒剤で実刑を受け、三年ぶりに服用した。やはりすぐに幻覚が出た。白壁に向かって茫然として立ちすくしたり、奇妙な叫び声をあげたりしている。男に尋ねてみた。

「いつまで壁に向かって立っているのだ」

「見えねーか」

「なにが」

「ほれ、壁の中に婆さんがいるではないか」

「婆さん？」

「頭に出刃包丁を刺して、婆さんが立っている」

「……」

「頭から血を流して、恨めしそうに俺を見つめている」

「……」

白壁に立ち続けること十分くらいしてから、婆さんは消えたいらしい。男は白壁を離れた。ところが、今度は左腕をしきりに振って、私に腕を差し出してくる。

「取ってくれ、取ってくれ……、はよー、取ってくれ」

「何を取るんだ」

「腕の中からウジ虫が湧き出てきた。取ってくれ……、はよ、はよ、取ってくれー！」

男は「ワー！」と叫んで、しきりに左腕を振った。そして、右手で左腕を激しく摩り始めた。

「取れない。取れない。はよ、はよ、取ってくれー！」

「なにもいないよ？」

「ワー！ 気持ち悪いよー、ほれ、また一匹、白いのが出てきた。気持ち悪いよー」

男は気がふれたように、左腕を激しく振り続けている。

覚醒剤の幻覚に襲われれば室内に閉じこもる。外から自分が眺められていると思い込み、侵入されないように、厳重に鍵をかけて隠れている。

「首筋に電気の針をあてる奴がいる。お前は誰だ！」

首にバチッとした痛みが走り、顔を歪める。これも麻薬の幻覚である。

さて、この観音経に登場する羅刹や鬼は空想の生きものである。観音経は、これからいろいろな動物を登場させて、観音力のパワーが飛び出してくる。この鬼の場面はその序幕である。

縄を踏んで蛇と勘違いして驚くことがよくあるが、これは恐怖の潜在意識である。「お化けの正体見たり枯れすすき」という川柳のように、真夜中のベランダにヒラヒラと舞う洗濯ものを幽霊と勘違いしてしまうこともある。人間にはいつもヒヤヒヤとした冷たい意識が隠されているから、その妄想にさいなまれて恐れるのが幻覚である。

夢の不可思議なストーリーは、これまでの体験が時空を越えて構成された寸劇である。日常生活では体験できない形状や動作などがまじりあっている。覚醒剤の幻覚症状は、夢を現実のなかで演じているようなもので、白昼でも悶え苦しむのである。

観音菩薩に「覚醒剤を絶対に辞めます」と固く誓い、観音経を読めば体内の悪魔は逃げていく。釈迦牟尼如来は八万四千の聴衆に、麻薬の怖さと絶滅について説いた。